●◆しゃばのしがらみを超えて、仏の願いに生きよう◆●

仏の願い

平成 20 年 西雲寺だより　冬号（9号）

御正忌報恩講のご案内

11月28日(金)～30日(日)

28日お逮夜(2時)
お初夜(7時)（武周お講）
29日お日中(10時)
大逮夜(2時)（御伝鈔）
お初夜(7時)（御伝鈔）
30日満日中(10時)

法話　福井　**野世信水師**
（29日より）

右記の通りつとめさせていただきますので、お誘い合わせの上ご参詣下さいますようご案内いたします。

親鸞聖人のご生涯（前編）

ご誕生

親鸞聖人は平安末期の承安三年（１１７３）洛南の日野の里でご誕生され幼名を松若丸といいます。父親は藤原氏の一族である日野有範（ありのり）といい、母親は吉光女（きっこうにょ）といわれました。幼年より聡明で、泥で仏像を造り「ナム仏」と手を合わせていたそうです。しかし、父親は聖人四歳の時出家し、母親は八歳の時亡くなり、孤児となってしまわれたのです。

当時は「平家にあらずば人にあらず」というほど栄華を謳歌した平家の権力にもかげりがさすようになり、源氏が台頭し、奈良の東大寺や興福寺という両大寺さえ兵火かかってしまいました。また天変地異による深刻な飢餓にみまわれ、養和二年の四、五月の二ヶ月に、洛中だけで四万人を超える死者を出したといわれます。このような厳しい状況のなか、聖人はどれほど小さな魂を悩ましたことでしょうか。

出家

養和元年（１１８１）聖人数え年九歳のとき、伯父の日野範綱（のりつな）卿に手を引かれ、天台宗青蓮院（しょうれんいん）に慈円（じえん）和尚を訪ね得度をされます。師の慈円が「今日は日が落ちてしまった。明日の朝にでも得度して進ぜよう」というと松若丸は、

「明日ありと　思う心の　あだ桜
夜半（よわ）に嵐の　吹かぬものかは」

と歌をよみ、その日のうちにお得度を受け範宴（はんねん）と名告り、一人の出家求道者（ぐどうしゃ）となられたのです。

聖人の出家得度の動機について「御伝鈔（ごでんしょう）」には

興法（こうぼう）の因うちに萌（きざ）し、
利生（りしょう）の縁ほかに催（もよお）
いしによりて

としるしています。九歳の幼い聖人にたまたま興法利生の因縁、即ち仏法を興隆（こうりゅう）し、衆生を利益（りやく）しようとの因縁が働いたからだというのです。聖人の胸中を思えば、不安に満ちた世相のなか、両親を失って生きる悲しみ苦しみが、ふとその身に求道心として動いたから、出家得度する決心をされたのだろうと思われます。

青蓮院のクスノキ

比叡山にのぼる

出家した聖人は比叡山延暦寺にのぼり、学問と修行の道に入られます。比叡山は伝教大師最澄（さいちょう）が開いた天台宗の根本道場であると同時に、日本における仏教の最高学府であり、最澄は国の宝ともいうべき真実の求道僧を育成することを理想としていました。実際、後に鎌倉仏教の祖師となった法然上人、道元禅師、日蓮上人など、みな若い頃比叡山で修行を積んだ方々です。しかし当寺の比叡山は貴族の子弟が多数入山して僧階の上位を独占し、また彼らは自分たち一族と結びつき、莫大な荘園と僧兵をかかえる一大勢力となっていました。権力争いや僧兵の横暴など、伝教大師の理想とはかけ離れた堕落ぶりは、はなはだしかったようです。

比叡山における聖人の身分は堂僧であったといわれます。僧侶は学生（がくしょう）、堂僧（どうそう）、堂衆（どうしゅ）と分かれており、堂僧というのは常行堂において口に阿弥陀仏の名を称え、心に阿弥陀仏を念じながら本尊阿弥陀仏の周りを一心不乱に歩き続ける常行三昧（じょうぎょうざんまい）を修する僧のことをいいます。聖人は比叡山を下りる二十九歳の春まで、二十年間を堂僧として修行に励まれたといわれています。

比叡山　横川中堂

磯長ご廟参籠

聖人は、青春の真っ只中を厳しい聖道の修行に打ちこまれました。仏教の伝統は戒（かい）、定（じょう）、慧（え）の三学といい、戒を守って身を正し（戒）、精神を集中して（定）、真理を観る智慧を得る（慧）ということです。しかし真剣に修行をすればするほど見えてきたのは、理想とはかけ離れた、煩悩にまみれた自分の姿だったのです。当時の聖人の心境を

「定水（じょうすい）を凝（こ）らすといえども識浪（しきろう）しきりに動き、心月（しんげつ）を観ずといえども妄雲（もううん）なお覆う。」

としるしています。

聖人は修行のゆき詰まりを解決すべく、磯長（しなが）の聖徳太子廟（びょう）に参籠（さんろう）することを決意されます。磯長の聖徳太子廟は三骨一廟と呼ばれているように、太子の母后、聖徳太子、太子の妃の三人の方の遺骨が一緒に葬られているところです。聖徳太子は仏教を我国に取り入れ、その精神でもって国を治めようとされた方です。太子が制定された十七条憲法には

あつく三宝を敬え、三宝とは仏、法、僧なり

とあり、聖人は「和国の教主」と崇められました。在家の身でありながら仏教精神に生きられた太子の生きざまの上に大乗仏教の理想像を見られたのではないでしょうか。

聖人は一心に修行のゆき詰まりの打開の道を念じ続けられました。その時太子の夢告を受けられたのです。それは次のようなものでした。

日域は大乗相応の地なり
汝の命根はまさに十余歳なり
善く信ぜよ　善く信ぜよ
真の菩薩よ

「日域は大乗相応の地なり」とあります。伝教大師は比叡山を大乗菩薩道の根本道場として建立されました。大乗とは大きな乗物という意味ですべての者が皆平等にたすかっていく仏道ということです。しかし当時の比叡山は女人禁制で山に近づくことはできず、選ばれた者しか修行することはできませんでした。聖人は大乗菩薩道という道が果たしてあるのかどうか、大きな疑問を持っておられたことと思われます。

次に「汝の命根は十余歳なり」とあります。自分の命の終わりを知らされたのです。その驚きは計り知れません。十余年という短いいのちの間に煩悩を断ち切り、生死を超える道を見出さなければなりません。しかし、この言葉は聖人の自力のいのちが十余年で尽きて他力すなわち如来のいのちに生きる新しい聖人の誕生を暗示しているように思われます。

次に「善く信ぜよ　善く信ぜよ　真の菩薩よ」とあります。これは真の菩薩のすがたはどこにあるのか、それを見出して菩薩道を歩めと聖人に呼びかけられていることばです。

聖人はこの夢告のあと比叡山へ戻られ懸命に修行にあけくれたことと思われます。

比叡山を下りて吉水へ

磯長（しなが）のご廟での夢告から十年がたった聖人二十九歳の春、今度は聖徳太子が建立され、救世（くぜ）観音菩薩を本尊とする京都の六角堂へ百日の参籠（さんろう）をすることを決意されます。

比叡山の大乗院には聖人のそば喰いの木像があります。これは聖人が比叡山から京都の六角堂へ百日参籠されていた頃、毎夜外出する聖人を不審に思った仲間の僧たちが、夜聖人の好物であるそば会を催したところ、不在のはずの聖人がおいしそうにそばを食べていたとか。それは聖人自刻の木像が聖人になりすましたものであったといわれています。

そばくいの木像

聖人は毎晩百日間参籠のために比叡山から京都の六角堂まで通われたのです。それは二十年間比叡山の山で修行してきたけれども、出家仏教の自力の教えではいかんともすくいを見出すことはできず、もう一回聖徳太子にゆくべき道を問い尋ねようと思われたのです。そして参籠の九十五日目の明け方、聖人は夢のなかで聖徳太子（救世観音菩薩の化身）より、「東山の吉水でお念仏の教えを説いている法然上人に凡夫の救いの道を求めよ」との告げを受けたのです。聖人はその朝、夜が明けるのを待って法然上人の草庵を訪ねました。これが聖人と法然上人との出会いでありました。法然上人六十九歳、聖人二十九歳でした。聖人が三歳のときすでに法然上人はお念仏の教えを説かれておりましたので二人が出会う縁が熟すまで二十六年という歳月が必要だったのです。夢告によって法然上人を訪ねた聖人は、それから百日間降るにも照るにも法然上人のもとに通いつめ、生死出ずべき道がお念仏一つであることを問い尋ねたのでした。そしてついに聖人が聞きとられたのは

「ただ念仏して弥陀にたすけられまいらすべし」

という一言であり、そしてここに仏法があり、仏法に生きる人々がいる。その歓びを聖人自身は後に、

「建仁辛酉（けんにんかのとのとり）の暦、雑行（ぞうぎょう）を棄（す）てて本願に帰す」

と書きとどめられたのでした。　（住職）

カメラがとらえた！西雲寺ほんこさんの舞台裏

その壱

土手刈り

草刈り

たたみふき

草刈り（武周のみなさん）

水拭き・掃きそうじ

お飾りモチ

提灯

げた箱設置

幕つり

～ 随　想 ～

忘れもしない、昭和39年11月5日、福井にて結婚式をあげ、すぐに東京目黒区での新婚生活が始まりました。

2年ほどしてから、三鷹市の公団住宅に当たり引越をし、その後長女が産まれました。それからの数年は平凡ではありましが、幸せな生活をおくっていました。

ところが昭和49年5月10日、夜中に突然苦しがる主人に私は慌て、119に電話してしまい、119番には長女がかけたと後で知りました。救急車が到着し、心臓マッサージなど、一時間半してくださったのですが、息を吹き返すことはありませんでした。一言の謀もなく、そのまま、心不全にみまわれた主人は、帰らぬ人となってしまったのです。主人が数年39才、私が数年37才、長女は5歳でした。そして私のお腹には5月26日出産予定日をひかえた赤ちゃんがいました。

あまりも急で大変なことが起きてしまったためでしょう、赤ちゃんは予定日待たずに、主人の初七日に産まれてきました。次女でした。

これから先、どうして生きて行こうかと途方にくれましたが、二人の娘の寝顔を見て、元気で素直ないい子に育ってくれる事を信じ、何としても生きて行こうと思いました。

次女が5ヶ月くらいになった頃、主人も私も福井出身でしたし、私の母親のたっての願いでもあって、福井に帰る決心をしました。この福井でふさなー軒家を買い親子三人での暮しが始まりました。

それからは、家での仕事を選び一生懸命に頑張ってきました。ある時次女がこう言いました。「おかさんはいつも仕事ばっかりして、寝んのか？」と。確かに私はほとんど一緒に寝たこともなく、子供が起きる頃にはすでに仕事をしている毎日でした。

それでも、おかげさまで体を壊すこともなく毎日は流れて、娘二人成長し

私は福井市内に嫁ぎ、二人の子どに恵まれ幸せに暮しております
次男には良いお婿さんがきてくださり、現在は子ども三人と一緒に6人で暮して居ります
結婚生活は10年足らずでしたが、主人が亡くなってから早や34年になります。長い人生いろいろありましたが。私も66才になりました。
主人もきっと、良くがんばったなーと褒めてくれている様に思います
これからも身体に気をつけ
孫の成長を楽しみに生きたいと思います

合掌

福井市松城町　　嶋田鈴江　　66才

カメラがとらえた！西雲寺 ほんこさん の舞台裏

その弐

「おみがき」
武周・二ツ屋のみなさん

「コーラス隊」
武周婦人部のみなさん

「菊の搬入」
越前市より２往復！

「帳場（会所）」
地元の世話方さん

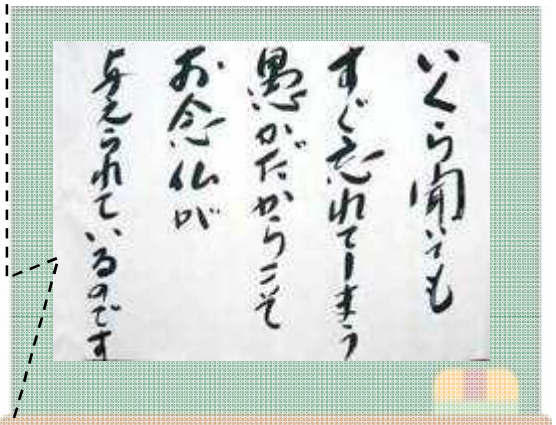
「お華立て」
千合町のおふたり

「おとき準備」
１７日、ずいきの皮むきなど

「おとき準備」
なかび１８日早朝５時頃に撮影！

お説教を聞いた後、「今日はいいお話しを聞かせていただきました。でもお寺の門を出るとすぐ忘れてしまいます。本当に情けないものですわ。」と言われませんでしょうか。この言葉の裏には、仏法を聞いて信心をとるというよりも、むつかしいことを理解し賢くなりたいという思いがあるのです。仏法は聞いて賢くなるのでなく、お念仏申させていただかねばならない愚かな凡夫の身にかえらせていただくのです。それを、聞いても聞いても忘れてしまいますというのは、謙遜したような言葉ですが、それほど邪見憍慢（じゃけんきょうまん）な言葉はないのでしょう。

（住職）



山門掲示板

表紙の写真は、大台所の中央で今も活躍する薪ストーブです。すき間からのぞく炎の輝きと、ボッボッと燃える頼もしい音、そして体がしびれるほどの暖かさは、これからの季節、とっても貴重な存在です。このストーブを囲んでのおしゃべりはとても楽しく、時間のたつのを忘れるほどです。

そのにぎやかなひとときを、さらに盛り上げてくれるのがイチョウの実です。ストーブの上でころころと転がし、透き通った実を「あつッ、あつッ」といいながら食べる、こんなささやかなことが最高に「幸せ」だと感じます。

お御堂の横に大きなイチョウの木があるのをご存じでしょうか。お寺で振る舞われるギンナンは、すべてあの木の恵みです。時には珍味「あんかけ」となって、お膳に上がることもあります。近年は実の数が少なくなってしまい残念ですが、頑張って集めています。

この冬も暖かいストーブとイチョウで皆さんをお待ちしています。いつでも遊びにいらしてくださいネ。

（護城美和子）

発　行

真宗仏光寺派 専念山 西雲寺（さいうんじ）

住職　護城一寿
筆頭総代　鈴木春夫
編集責任者　護城一哉
〒910-3523　福井市武周町５－２
電話　0776-97-2138
メール　kmgojo@mx3.fctv.ne.jp
ホームページ　http://arukou.net/

次世代の方、分家された方に！

お手元に２部届いた時には、ぜひご活用下さい。

みなさんの声 大募集！

原稿や作品はもちろん、ご意見、ご感想など、どしどしお寄せ下さい。郵送でもメールでも構いません。お待ちしております。